

日本武道の特質に関する考察

—剣道におけるすり足を通して—

大 坪 壽*

A Study of a Specific Feature of Japanese Budo —Through the Study of 'Suriashi' in Kendo—

Hisashi OTSUBO*

Abstract

It is argued some authors that, when we consider it as a cultural phenomenon, Japanese Budo (the Way(moral principle to follow) of behaving for Samurai) seems to have an aspect which is the core of the feature of Japanese culture. A cultural phenomenon ought to have a Steadfast faith as its core even though it has undergone various changes through ages. Japanese culture itself, whatever changes it has undergone, could not have developed its specific feature without a Steadfast faith as its core.

Thus the specific feature of Budo as a cultural phenomenon is thought to lie in the fact that its core or Steadfast faith was shaped by old 'Shinto' (the Way of living according to the Nature) and has been handed down from generation to generation, being influenced in its long history by such ideas as Buddhism, Confucianism and Taoism, and blended with various elements. Kendo again with that feature of Budo as its core, is thought to have a tendency to seek the Way.

We shall study in this paper that specific feature of Japanese Budo through the study of 'Suriashi'(A sliding walk) in Kendo.

KEY WORDS: *Shinto, Nokobunka, Steadfast faith, Suriashi.*

はじめに

日本武道の「心」を精神文化という観点から考察すれば、それは、日本における精神文化の特質の「核的側面」を持っていると考えられる^(#1)。

文化現象は、その時代的変遷を経ながらも、その「核」となるもの、一つの「不動心」^(#2)を持っているはずである。つまり日本の精神文化がどのように変遷を経過しても、どこか一点「変化しない所」がない限り、特質をもった文化の発展はあり

*鹿屋体育大学 National Institute of Fitness and Sports in Kanoya, Kagoshima, Japan.

得ないと考えるのである。

精神文化としての日本武道の「心」は、日本の農耕文化に基礎した「神道」(自然の道)^(註3)がその核を形成し、「不動心」となって、儒学・仏教・道教等と習合しながら、長い歴史的経過の中で、さまざまな要素がからみ合いながら育成・持続されてきたものとするのである。剣道もまた前述した日本武道の「心」をその「核」とし、人間としての「道」(神道において考えられた人間本来の「自然の道」ないし「カンナガラノ道」に表現されたその「道」につながるもの)への求道性が指摘できると考えるのである。

研究方法

本稿では、前述した観点に立ち、民族が最初にとりあげた生産様式は、それに対応して生まれた諸文化現象を決定し、民族文化の本質をなし、その影響を民族に伝えるものであると考え、農耕生産、伝統芸能、剣道に共通してみられる「すり足」について、文献(巻末参照)を基に日本武道の特質を考察するものである。

結果と考察

1. 農耕生産におけるすり足

日本は古来農業を基本産業としてきた国であり、その中心である水田耕作は湿地帯で開始されたようである。井堰、ため池を作るなどの灌漑農耕よりも原初的な湿原農耕においては、湿地に草、枝や土を運び入れ埋め土をする深田の処理は難事であったと思われる。泥沼、深田の中での作業は、力を入れて足を踏むことはできず、注意深い所作が要求されたであろう。足を上げて歩くこともできず、すり足が生産の可能性を高める農耕の姿勢として生まれ、陸稲農耕や畑作農耕においてもすり足は土を踏み固めず、したがって種子の発芽を妨げることはならなかった。踏み荒らさない、踏み固めない土からは種は芽として生きかえる。すなわち、生命のよみがえり(神道の「靈魂不滅」⁴⁾)をそこに見ることができる。これは神道の基本的概念である生成を表す「産霊」の心ということが出来る。

これは、単に足を泥にとられないようにという身体の安定のためばかりでなく生きとし生けるものを大事にする、あるいは生あるものをいとおしむという「心」を表したものが「すり足」といえるであろう。

2. 伝統芸能におけるすり足

農耕民族にとって人の生命を伸ばしてくれる穀物の霊、特に霊の強い稲の初穂は、神霊や人魂を強めてくれるものであった。祭では、米が神前に供えられ、神事芸能である神楽が舞われた。供された米により、神霊が再生され、共食することにより人間が霊的活力を獲得して再生するのが祭であった。

舞の根源はこの神楽と言われており、この中から中国から伝来の散楽の影響を受けた田楽や猿楽が生まれ、それから能が発生し、喜劇的な科白劇が狂言として分かれた。歌舞伎は風流踊りから出て先行の舞の要素を取り入れたものであると言われている。これらの伝統芸能では、歩行はすり足で行なわれ、しかもそれに重点が置かれている。例えば、能で、金春信高⁵⁾は能楽師は運びというすり足に生命をかけ、その運びは腰だと言い、日本舞踊では、藤間藤子²⁾は、腰を入れて歩く、足の運び、落ち着き、安定感が大事な点であるとすり足について述べている。

さらに伝統芸能の中で、すり足は表現の大きな部分を占めており、前述の金春信高は「能は歩くだけを鑑賞する芸術⁵⁾」とまで述べている。能に魅せられて、暇さえあれば能楽堂に足を運んでいたある外人の述懐を引用して、金春信高のいう「能の核心⁵⁾」を敷衍したい。

「最も魅力を感じるのは、演者が能面をつけて、すり足でしずかに出てくることです。そうして、橋がかりをしすがに通って、舞台上で謡をうたい始めると、いつも、奇妙な衝動にかられるのです。どうか、そのままいつまでも動かないでほしい。⁵⁾」

伝統芸能が発達する基礎となるものとして、折口信夫¹¹⁾は悪い霊を抑え、大地にこもっている魂を呼びさます「鎮魂^{へんばい}と反問」をあげ、武智鉄二¹⁸⁾や多田道太郎¹⁷⁾は、「反問のための姿勢」あるいは

「反問を際立たせる準備」として伝統芸能のすり足をとらえている。すなわち、「すり足」は「生命のよみがえり」のためのものであり、生あるものをいとおしむ「心」の表れたものと言える。

3. 剣道におけるすり足

神道における刀剣は、象徴ではなく、護身刀や、人が死んだ時に棺の上に刀をおく風習にみられるように、離れ逝く霊や生まれくる霊の安全と幸福を妨げる悪霊を祓う¹⁶⁾ことにより再生を助長する要素をもつと認められる。

古流における運足法についての記述を見てみると、鹿島神流では、据足、浮足、飛足の三つを嫌い、その運足法では動きは小鳥の歩行のように直線的、かつ衝動的で、四方八方への体捌きは不可能となる上、剣に加わる力は極めて弱いものになる¹⁴⁾と述べている。また、宮本武蔵は、飛足、浮足、踏み据える足の三つを嫌い⁸⁾、別の条では以上の運足法のほか、からす足などといって、色々左足を踏む事を嫌っている⁹⁾。これらは、直接すり足のことを述べているのではないが、足の運びが上体に影響を与えれば、刀法にも影響を与えることになる。そうならないためには当然すり足にならざるをえないであろう。また、全日本古武道大会における各流派の演武を見ても動作にすり足を認めることができる。日本剣道形では足音をたてず、すり足で行なうことを原則とし、このすり足は安全な足運び¹⁵⁾であり、現代の剣道においても、常にすり足で動作するのがよく、浮足、跳足、飛足、踏みつけるなど皆悪い踏み方¹²⁾であり移動によって生ずる体や構えの動揺を防ぐためにも大切な事である⁶⁾。上述のように剣道におけるすり足、腰を据え、上半身の平静を保ち、飛んだり、跳ねたりせず、「静かなる重心の平行移動」のための運足法という事ができる。

剣道における打突の技術は種々の要素からなり難しいのはもちろんであるが攻防には打突しないところもあり、このところを、佐藤忠三は「剣道の見通しえない。むしろ打突以上の大切なものがある。ヴェートーベンが音楽のむずかしいところは、音の無いところにあると言っている¹³⁾」と述べ、中山博道は足捌きを心掛けて稽古し、師の根

岸信五郎の稽古を評して、足捌きが主体で、少しの音もなく稽古をし、その場にもし眼を閉じていたとすれば、稽古をしているのさえ疑うほどで、絶妙な神技といってもさしつかえない剣風であったとしている。「真の稽古はこの静かさが極意で、打刺の妙味は二の術に過ぎない¹⁾」と述べているように、単に安全で動揺を防ぐばかりではなく、静かなるすり足の中に、打突しないで打突以上の感銘を与えるという、能の核心と一致するものを見ることができ、これが余韻、品格、位等と言われるところのもので体得しなければいけないものであろう。その点について玉利嘉章は「花柳流のお師匠さんが歩かれる持田盛二先生の姿に感銘し、車を止めて暫く見入っていた¹⁹⁾」話を紹介している。

この静かな「すり足」の中に、相手を打突しないで心を打つという剣道の本質が表されており、それは、生きとし生けるものを大事にする、生あるものをいとおしむ「心」の表れたものということができる。

以上まとめてみると、農耕生産におけるすり足には、安定や生命のよみがえりを、伝統芸能におけるすり足には、安定や生命のよみがえりを、剣道におけるすり足には、安定や打突しないで、打突以上の感銘を与える、すなわち心を打つことが表されている。すり足は、技法的には安定、心法的には神道に見られる「産霊」の心を核的要素（不動心）として持つものといえよう。

まとめ

わが国における剣道は、実用的で殺伐とした中にも、上述のように特質は生あるものを大事にし、さらにその生命はよみがえりという神道の「産霊」の心を核とし、その心の表れた「すり足」に見られる、打突しないで心を打つ、刀を抜かないですますことは、官軍の江戸攻撃の際の、西郷南洲と山岡鉄舟の働きに具現化された「鞘の中¹⁰⁾」、針谷夕雲と小出切一雲の「相抜け¹⁰⁾」に見られる「道」を達観した働きであり、新渡戸稲造の「武士道の窮極理想は平和⁷⁾」、鈴木大拙が「刀工正宗の作品に関する伝説¹⁶⁾」の解説で日本の刀剣が人を切る

以上のものを求め、人の心を打つような神聖なものを求めているところ、沢庵のいう「活人剣³⁾」である。すなわち「道」である。

注1. イザヤ・ベンダサンは、日本における精神文化の特質を「日本教」と呼び、日本教の根本理念(筆者の言う核的側面)である「人間性」を定義するものが、「法外の法」と「言外の言」であると指摘している(イザヤ・ベンダサン:日本人とユダヤ人,山本書店,東京,1971, p.95)。

注2. 「不動心」とは、心が四方八方へ思いのままに動きながら、しかも少しもそこに止まらぬという心境をいう(池田論:沢庵不動智神妙録,徳間書房,東京,1975, p.35)。イザヤ・ベンダサンは、この「不動心」ないしは「核」となるものについて注1で見たごとく、「法外の法」と「言外の言」であると指摘しながらも、次ぎのごとく述べている。「・・・ここで問題となるのは日本人のいう「人間」「人間性」「人間味」「人間的」とはいったいどのような内容で、それを基とする「法外の法」とはどんなものか、・・・私すなわちユダヤ人の考え方からすると、これは一種の宗教的規定だといわざるを得ない。」(イザヤ・ベンダサン:前掲書, p.83)と述べ、さらに「日本教の根本理念を形成する「人間」なるものの定義が、すべて言葉によらず、言外でなされていることである。・・・日本人は、もっとも大切な事は、言葉によらず言外によるから、これはもういかんともしがたい。・・・一切の異邦人は、この聖域に近寄ることを許されない。ローマ軍はエルサレムの神殿の至聖所に乱入することはできたが、日本教のこの至聖所には、たとえ原爆をもって押し入ることはできない。」(イザヤ・ベンダサン:前掲書, p.95)。

注3. 「神道」とは、一般にいうところの宗教と異なっている。「教義書」がないために議論が多い。筆者が本稿において主張するところの「神道」というのは、日本民族の中に主観

的形式的な文化的感覚として育成持続してきた民族的・文化的感性(鈴木大拙師のいわゆる「日本的靈性」とでも呼ぶべきもの—鈴木大拙:鈴木大拙全集第8巻,岩波書店,東京,1981, Pp.24-26.)のことである。

引用・参考文献

- 1) 堂本昭彦:中山博道剣道口述集善道聞書,東京,1988, pp.76-77.
- 2) 堀口清,藤間藤子:芸の心と剣の心,剣道時代,12(12):63,1985.
- 3) 池田論:沢庵不動智神妙録,徳間書房,東京,1975, p.16.
- 4) ジュアン・エルベル:神道,神社本庁,東京,1970, p.88.
- 5) 金春信高:動かぬ故に能という,講談社,東京,1980, p.14.
- 6) 中野八十二,坪井三郎:図説剣道事典,講談社,東京,1970, p.77.
- 7) 新渡戸稲造:武士道.,岩波書店,東京,1967, p.106.
- 8) 大木陽堂:宮本武蔵五輪書,25版,教材社,東京,1939, p.52.
- 9) 同上書:p.120.
- 10) 大森曹玄:剣と禪,春秋社,東京,1966, pp.38-39.
- 11) 折口博士記念古代研究所:折口信夫全集第18巻,日本芸能史六講,中央公論社,東京,1967, p.356.
- 12) 佐藤忠三:剣道の学び方,体育とスポーツ出版社,東京,1981, p.108.
- 13) 佐藤忠三:剣道と人生,佐藤忠三,仙台,1968, pp.124-26.
- 14) 関文威:鹿島神流,杏林書院,東京,1976, p.29.
- 15) 重岡昇:詳解日本剣道形,スキージャーナル,東京,1977, p.220.
- 16) 鈴木大拙:禅と日本文化.,岩波書店,東京,1970, pp.65-66.
- 17) 多田道太郎:しぐさの日本文化,筑摩書房,東京,1973, p.166.
- 18) 武智鉄二:伝統と断絶,風濤社,東京,1969, pp.207-08.
- 19) 玉利嘉章:剣道とは,福岡県剣道道場連盟・国際社会人剣道九州クラブ,福岡,1983, pp.10-11.